

SWORD ART ONLINE

Material Edition: Remix

ワールド・ウォームハート



アインクラッド五十層

2023年11月

一日の狩りを終え、ホームタウンである五十層主街区《アルゲード》に戻ってから、俺は奇妙なコンディションの不調を自覚し続けた。

体の動きがやけに鈍い。足取りが定まらない。まるで必要筋力値を満たしていないアイテムを装備してしまった時のような重量感に、メニユーウィンドウまで出して確認したが別に赤字文字になっていない箇所はない。

広場から裏通りへとふらふら進みながら、俺は懸命に考えた。

もしこの不調が、なんらかのシステムのバッドステータスであるなら、視界にその旨の警告文が点滅するはずだ。それ以前に、街区圏内に入った時点で、あらゆる毒や麻痺は消滅しなくてはならない。

もしや未知のモンスターに新種のバステでも食らったのだろうか。圏内に入っても消えず警告も出ない——例えば《呪い》のような。

そう考えた途端、足元から強烈な悪寒が這い上がってきて、俺はぶるつと全身を震わせた。

アインクラッドはまだ十一月、冬が訪れるには早い。なのに、薄手のレザーコートを突き抜けて骨まで凍み徹る寒気は、真冬の本枯らしのようだ。

これはとても自分の部屋まで辿り着けそうにない。そう考え、俺は必死に脚を動かすと、最初に見えた宿屋へと転がり込んだ。フロントでチェックインし、鍵を貰うと、半ば這いずるようにして奥まった部屋のドアまで辿り着く。

狭苦しい部屋の簡素なベッドに腰を下ろし、武器防具を全解除して身軽になってから、とりあえず手持ちの解毒ポーションを全種オブジェクト化させて片端から飲み下した。さらに、《あらゆるバステを解除する》はずの浄化結晶まで使用し、これでステータスが回復するであらう、とその瞬間を待った。

——しかし。

「……これは……本格的に……ヤバイ……」

悪寒はいつこうに去らず、視界までくにやーつと歪み始めたではないか。

たまたらずドサツとベッドに倒れ込み、回転数が限界まで落ちた頭で必死に対策を練る。《呪い》ならば教会のNPCに頼めば解除してもらえるのだろうか？　だがそもそもカオス極まるアルゲードの街に教会なんかあったか？

街区の地図を思い浮かべているうちに、ふうつと意識が遠ざかりかけ、俺はついに泣きを入れるもやむなし、と判断せざるを得なくなった。つまり、自力での対処を断念したのだ。

メニユーを呼び出し、フレンドリストを開く。ぼやける視界に表示される、決して長いとは言えないリストからクラインの名前をクリックし、メッセージ作成ボタンに触れる。浮き上がったホロキーボードをちこちこ叩く。

『もうだめ　しにそう　たすけて』

という、絶体絶命感の中にも詩的センスあふる短文をどうにかタイプし、送信ボタンを押して、最後に部屋のロックモードを《フレンド開錠可》へと変更したところで、ついに意識がぶつと途切れた。

ひんやりとした心地よい感覚が、額を撫でた。

わずかに覚醒しかけた俺は、自分がいつのまにか首まで分厚い布団に覆われていることに気づいた。凍るようだった悪寒は、汗が滲むほどの熱気にとって代わられている。

不快な暑苦しさの中で、おでこだけを冷やしているものは何だろうと手を動かしかけた、その時――。

「あ、起きた？」

と、涼やかかつ甘い声が枕元で響いた。何度脳内リピートしても、クラインの野太い『おう、起きたか』ではなかった。

重い瞼を懸命に持ち上げ、視線を動かした先にあったのは。

ギルド《血盟騎士団》副長、最強の細剣使い、《閃光》アスナの優しい笑顔だった。

「……………っ！っ！っ！」

ぎょおっとと跳ね起きようとした俺の体を、アスナが左手でそっと押さえた。

「だめよ、まだ寝てないと。そんなすぐ治るもんじゃないから」

めっ、とばかりに人差し指で俺の頬をつつく。

なんだこれは。なぜこんなことに。謎のバッドステータスのせいでクラインがアスナに見えているのか。だったらエギルも呼んでみるか。などとアホなことをぐるぐる考えてから、俺はようやく事の真相に思い至った。

レベル順にソートされたフレンドリストには、クラインの名前のすぐ上に、最近登録したばかりのアスナの名前がある。半ば気絶しながら適当にクリックしたいで、指先の照準がズレたのだ。つまり俺は、自らアスナに――アインクラッド最大のアイドルにして攻略組のヒ

ロインに、情けないヘルプメッセージを送ってしまったのだ。

さあどうする。どうすればいいのこれ。

と脳内をぐらんぐらんさせる俺のおでこから、折りたたまれたハンカチを取り上げたアスナが、それを傍らのテーブルの上に置かれた大きなボウルへと沈めた。ちゃぶん、と小さな水音。

すぐにハンカチを引き上げ、軽く絞ってから、再び額に載せてくれる。気持ちいい冷気が、全身の暑苦しさを僅かながら遠ざける。

「ただの水の冷感エフェクトは長持ちしないんだけど、ここじゃこれしか手に入らなくて。何もないよりマシよね」

にこっと微笑むアスナに、俺はとりあえず――唯一言えることを言った。

「あ……ありがとう。助かったよ……」

すると、かすかに色味の増した気がする顔をささっと振り、アスナはもう一度笑った。

「いいんだよ、こんな時はお互い様だもん。一人じゃ心細いの、解るから」

こんな時。

ということとは、アスナもこの謎のバッドステータスを経験したことがあるのだろうか。

「いったい、このバステ、何なんだ……？ 解毒ポーションも、結晶も効かないなんて……」

訊ねると、アスナははしほみ色の目をぱちくりと瞬かせ。

ついで、ぷーっと噴き出した。

「あははは……ご、ごめんね……でも……ふふ………そっか、初めてか、キミ」

「そ……そりや初めてだよ。聞いたこともないよ、こんなステータス」
やや傷つき、そう言い返すと、もう一度ゴメンゴメンと謝ってから
アスナはハンカチ越しに俺の額を撫でた。

「あのね、このバッドステータスは、毒でも麻痺でもなくて……病氣
だよ。つまり、風邪」

「か……カゼえ!?」

「そ。この仮想体のキミじゃなく、現実世界の、本物の体が風邪を引
いたんだよ。いま、向こう側もちょうど季節の変わり目だからねー。
去年の今頃も、寝込んだ人いっぱいいたんだよ?」

「あ……ああ………」

俺は思わずほうーと息を漏らした。

これはまったく盲点だった。しかし、確かにあり得ることだ。普
段、現実の体の五感はキャンセルされているが、さしものナーヴギア
も発熱による不調までは無効化できない。つまり、文字通り本物の体
調不良が俺を苦しめているわけだ。

「だから、おでこ冷やしても気休めなんだけどね」

そう言つて、再びハンカチを濡らすアスナから視線をはずし、俺は
時刻表示を確認した。午後十一時三十分。

俺が宿屋に転がり込んだのが確か六時頃だったから、アスナはもう
五時間以上もぶっ通しでこの作業を繰り返しているわけだ。《濡れた
布製装備》が発生させる冷感ほ、最大でも五分程度しか持続しない。

気休めなどと言っているが、大変な手間だ。

不意に、胸を突き上げてくる奇妙な感覚に、俺は途惑った。しかし、
半は朦朧とした意識では、その意味するところまでは理解できなかった。
た。

代わりに、額にハンカチを載せて引つ込めようとしたアスナの手
を、布団から出した手でそっと掴んだ。

「ど……どうしたの?」

口ごもりながらも、笑顔で首を傾げるアスナに、返せる言葉などあ
るうはずもない。俺だって、自分がいったい何をしているのか説明で
きないのだから。

なのに、口が勝手に動き、掠れた声が漏れた。

「もう、ハンカチはいいよ。代わりに……手で、触つてて」

——調子乗んな!!

と引つ叩かれる、という予想を裏切り、「……うん」というか
細い応答があつた。

俺の手をぎゅつと握り返すと同時に、ひんやりとしたもう一本の手
が、滑らかに額を撫でた。全身の気だるさが、すうっと遠ざかる。病
の不安感が、穏やかな安心感に溶かされていく。

浅いまどろみに揺れる俺の耳に、子守唄のような声が届いた。

「ねえ、キミ……キリト……くん。風邪、つらかったら……わた
しにうつしても、いいよ。そしたら、早く治るかもしれないよ」

そして、瞼を閉じた俺の頬を、何か柔らかな感触が撫でた。

目を開けて確かめるような真似は、もちろん、できなかった。

「……うー………」

アスナは、一声唸ると瞼を開けた。

自宅の白い天井ではなく、年季の入った黒い板張りが目に入る。べ

ツドも硬く、枕も薄い。せめてもう少し上等な宿屋に移りたいのはヤマヤマだが、この体調では起きて歩く気にもならない。

まさか——本当に風邪がうつるとは!!

いや、実際にウイルスが感染したわけではない。現実世界では、あの人との接点はまったくないはずなのだから。しかし、あまりに見事なタイミングではないか。

最強のソロプレイヤー、《黒の剣士》キリトは、よもやその突出したステータスゆえではあるまいが、アスナが一晩看病したらあつさり体調を回復させてしまった。それはいい。大いに結構。

だが、入れ替わるように自分が倒れてしまえば、これはもう偶然とは思えない。さつきまでキリトの寝ていたベッドに横になり、うんうん唸っているうちにどうやら寝てしまったらしい。窓から差し込む日差しは、すでに午後深い時間のものだ。

視線を移すと——ベッド脇の椅子は空だった。

昼過ぎまでは、おでこの濡れハンカチを換えてくれていた記憶がうつすらとある。だが、その後アスナが本格的に寝入ったと見るや、日課の狩りに出てしまったのだろう。

「まあ……しよーがないけど、さー」

小さく呟く。

ギルドに所属するアスナと違い、ソロのキリトにはレベリングを助けてくれる仲間はいない。一日でも無駄にすれば、取り戻すのに大変な苦勞をしなければならない。それは解る。

でも。

頼られて、嬉しくて、暖かだった気持ち、冷たい寂しさに埋められていくのは止められない。体は熱っぽくて苦しいのに、胸の奥だけ

がしんしんと凍っていく気がして、思わず目尻に涙が滲む。

「……………あーあ……だめなのかな……やっぱ」

ぎゅっと両眼をつぶり、頭まで布団を被ろうとした——その時だった。

いきなり、部屋の真ん中に、青い光の渦が出現した。ぎゅううっと音を立て、たちまち高さ二メートル近い楕円形にまで拡大する。

「……回廊結晶!？」

枕から頭を持ち上げ、そう口走ると同時に、黒い人影が即席のゲートから飛び出してきた。

それは無論、《黒の剣士》キリトだった。他の者であろうはずがない。しかし——。

「あ、あのね……ちゃんとドアから帰ってくればいいじゃ……」

そこまで口走ってから、アスナはようやく、キリトが両腕に抱えているものに気づいた。

巨大な木製の桶だ。いや、もうタライと言うべきだ。

そして、その中には、何か白い粒子が山盛りになり、午後の日差しを受けてきらきらと輝いていた。

まじまじと数秒間眺め、やっとその正体に思い至る。

「そ……それ、雪……? でも……こんな季節に、どこから……」

訊ねると、キリトはタライを慎重にテーブルの上に置いてから、アスナを見て、ぐいっと頭を下げた。

「悪い、遅くなった! もっと早く戻ってくるつもりだったんだけど……あのドラゴン野郎がしつこく……」

その言葉に、アスナは山盛りの雪の出所を悟った。五十五層の端にある山の頂上だ。確かに、あそこの万年雪は夏でも消えることはない。

しかし、辿り着くまでにはモンスターがうじゃうじゃ出る長大な山道を登らなければならないし、その先にはフィールドボスであるアイスドラゴンが待ち構えている。

むしろ、わずか二時間足らずで戻ってきたのが奇跡と言ってよい。

「……なんで、そんな……」

呆然と呟くアスナに何も答えず、キリトはテーブルからハンカチを取り上げると、タライの雪に突っ込んだ。数秒後に引っ張り出したそれは、見事に凍りついている。

「ほら、横になれよ」

言われるまま、再び枕に頭を戻すと、額にきんきんに冷えたハンカチが載せられた。《凍った布製装備》の発生させる冷感、濡らしただけの布をはるかに上回る。

「あ……気持ちいい……」

呟き、微笑むと、キリトも照れたようにニカツと笑った。

おでこは冷たいのに、しかし同時にほんのりとした暖かさを感じ、アスナは目を瞬かせた。

そつと手を伸ばし、黒いコートの袖から伸びる手に触れる。

雪を掻き集めてきたばかりのキリトの指は冷えきっていたが、強く握っているとすぐに温度を取り戻し、アスナの手を握り返してきた。

「ねえ……、今度はわたしの風邪をもらってよ」

囁くと、苦笑まじりの答え。

「おい、それじゃキリがないよ」

「いいじゃない。キリトくんがまた寝込んだら、わたしも雪取ってきて、カキ氷にしてあげる」

「……それなら、いいかな」

微笑みを浮かべたまま、アスナは顔を閉じ、待った。

(終わり)